事業所通信No. 99

NPO法人はちくりうす
住所：東京都鷹番3-14-9
TEL：03-3793-3012
FAX03-5856-6700
E-mail：office@8curious.or.jp
編集担当：島田　宏

10月ヘルパー月例会報告

テーマ：映画を見て考える

出席：21名(職員3名)
場所：鷹番住区センター

今回の月例会は８，９月のヘルパー募集で新しく仲間に加わったメンバーを含む総勢24名(男性11女性13)の参加という、今までで最も参加者が多い会となりました。通常の月例会では利用者の情報共有をおこないながら支援を考えていますが、仕事を始めてまだ日が浅い方も多く、簡単な事務連絡の後ＤＶＤ上映会という形で進行しました。

作品は【星の国から孫ふたり～「自閉症」児の贈り物】という自閉症の兄妹が診断されてから家族や周囲の人たちがそれを受け入れてともに成長していく姿をスペシャルエデュケーションの紹介を兼ねながら作られた物です。機会がありましたらぜひ一度ご鑑賞ください。

今回は上映後、参加者からの感想の一部を紹介し報告に代えさせていただきました。紙面の関係ですべて紹介できないのが残念ですが、たくさんの仲間とともに仕事ができることの喜びを感じました。

◆映画を見て、自閉症について分かりやすかったです。
彼らをこの世界に合わせてもらうだけではなく、彼らのいる世界に私たちが合わせることの大切さ。嫌な事を嫌というのではなく、泣いたりしてアピールしていること。彼らは彼らなりのサインを出していることを知りました。そのサインをひとつでも多く汲み取っていきたいと思いました。まだまだお父さんのお母さんや地域の人みたいに「遺伝」や「虐待」と言う人は多いと思います。そういう人等に知ってもらうために、かおるくんのお母さんは通信を始めました。ヘルパーの立場として、私ができる事を考えました。私ができる事は皆さんのことを知ってもらう為、どんどん地域で活動し、住みやすい環境やコミュニティーを創る事かなと思いました。もっと皆さんに関わりながら実現していきたいと思います。
◆自閉症は166人に1人だなんて、思っていたよりも高い確率だった。（映画の中で出てきた、アメリカの例です）一般の人から「ヘルパーは大変」という声を聞くと、差別していると思ってしまうが、もし自分の子が自閉症だったら大変だなと思ってしまう自分も差別視してしまっていることを改めて実感した。障害があることで差別をしていないと自分自身思っていなかったのだが…

◆一瞬ではあったが、家族観のすれ違いが垣間見えるシーンがあった。療育にあたり、家族、親族の十分な理解が重要となってくる。映画では、初めはすれ違いや理解しきれていないところから、かおるくんが辛い思いをしていたが、徐々に周りが変わっていき、受け入られていった。これはとても簡単なことではないと思った。
◆聴覚過敏がある人たちは一体どのように音が聞こえているのだろうか。といった、父親の素朴な疑問に感心した。聴覚過敏だから大きな音や特定の音にパニックになってしまっていて大変だなぁ、困ったなぁ、どうにかならないかなぁといった事実ばかりにとらわれてしまわず、まずは相手の状況・状態を想像して、相手になったつもりで、自分だったらどう思うかを考え、感じることが大切であると感じた。
◆アメリカと日本の療育制度の格差が感じられた。また、アメリカの訪問療育に興味関心が湧いた。
◆発達障害を持った子どもがやがて成長して社会に出なければならない現実があるということを忘れてはならないと感じた。その上で、当事者が自立していくためには社会に受け入れるだけの環境を整えて行く必要性があ

るということを感じた。
◆映画を観ながら、自分の子どもが発達障害を抱えてしまったら、と考えると自分はどのような判断をするのか、自分でも未知数だなと感じていた。しかし、映画が進むにつれて、もし、そのようになったとしてもなんとか育てていきたいと自分の気持ちが変わっていくのを個人的に感じた。簡単なことではないが諦めずに啓発活動を行っていく、あるいはその子自身を理解しようと努力し続けることが大切であるのではないかと考える。
◆おしっこしーしーお祝い記念を行おうとするほど、一つ一つのステップアップは遅くたって、成長していくことが保護者としてはとても嬉しく励みにもなる。そうした意味で、ガイドの中で利用者さん達の新たな発見を共有することで親としても嬉しいことがあるのかもしれないため、そういった瞬間瞬間を忘れないこと、そして伝えていくことが大切であるのかもしれないと思った。
◆祖母の言葉で「心の差別は根深い」というものがあった。普段の支援の中にも、悪気はなくても無意識の中で生じてしまっている差別があるのではないかと自分に対して問題定義してみたい。しかし、自分でそのことに気がつくことは容易ではないため、日頃からの情報共有、確認は非常に大切であると感じた。自分の中だけで完結させてしまわないことが一番大切なのかもしれない。
◆母という存在は子どもと一番近い存在であることが多い。だからこそ、先のことを考えれば不安でいっぱいになってしまう。また、身近にあるちょっとしたこと、繰り返される過ちに対して、苛立ち、強く当たってしまうことにつながっていってしまうのではないかと感じた。しかし、そうなってしまいがちな事は人間として当然なことであり、自分に非を感じることはないと感じた。その上で、どのようにしていくことでお互いにストレスが少なく過ごしていくことができるのか、コツのような部分を情報提供していくことも可能である部分もあるのではないか。

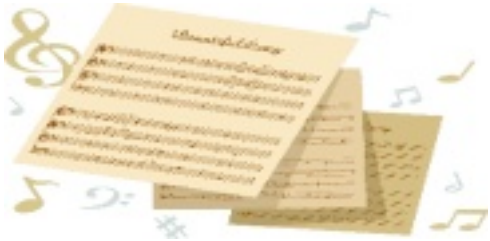
◆自閉症の子どもたちは日々、感覚的につらい思いをしている、といったセリフがあった。その上、そのことを言葉にできないとセリフは続く。ここで言葉に出せない代わりにどのような形に変わって表出されているのか知ろうとする、考えることで利用者さんに対しての理解が深まると考えられる。
◆映画のシーンで最後はみんなが得られたことについて家族や親戚がテーブルを囲み共有しているシーンがあるが、その中のうちに「物質で得られない豊かなものを与えてくれる」といったセリフがある。自分のガイドヘルパーとしての経験を振り返ると、具体的な何かを口に出して表現することは難しいが「物質ではない、素敵な何か」を確かに与えてもらっていると思うことができる。そうした意味で、普段、共にお出かけをする利用者さんたちに感謝の気持ちが湧いてきた。

10周年記念イベント

はちくりうすは10歳になりました

日時：12月13日土曜日　午後　場所：中根住区センター地下レクリエーションホール

すでにお知らせしている通り、今年ははちくりうすが生まれてから10年目になります。12月には記念イベントを行いますので皆さまぜひお越しください。『はちくりうすバンド』が皆さまをお待ちしております。



8月研修会報告

『事例から考える「問題行動」への支援方法』

8月30日に高津市民会館で開催された『事例から考える「問題行動」への支援方法』のセミナーに参加しました。講師はNPO法人サポートひろがり代表の山田由美子さん。知的障害がある方のしあわせを目指すために、『支援者』の支援をと活動をされている方で、川崎市で施設も経営されている方です。

今回のテーマは「事例から考える問題行動への支援方法」についてです。山田さんは問題行動とあえてそのようなことばをつかっていますが、山田さん自身は当事者の行動を問題行動とは思っていません。問題行動と思っているのは多くが支援者側であり、当事者にとってはその行動は必要な行動であったり、支援者の支援が不十分からくる行動だったりします。

一例を挙げると、過去の嫌なことを思い出すと頭突きや叫び声を繰り返す方がいたとします。一般的に自閉症の方はとても記憶力がよいと言われいますので、いいことも覚えている一方、嫌なことを忘れることができません。そのような場合、支援者が一方的に「しずかに！」「なんで大きな声をだすの」「大丈夫？大丈夫？」と現象面のみを捉えて支援をすると、いつまでも問題行動という考えでしか捉えることができません。当事者の立場にとって考えると、原因をご本人の記憶力のよさや、忘れないことがあるとすれば、支援方法も自ずとかわり、例えば車通りが多い大通りでは叫びを認めたり、嫌なことを思い出しても叫ばない時に褒めて成功体験を増やすという支援方法もあるかもしれません。

つまり、当事者のひとつひとつの行動には意味があり、「問題行動」というのは当事者に対して支援者が問題を押し付け自分を正当化しているだけに過ぎず、さらに支援者の支援の仕方の結果によるものだということです。当事者の方の行動障害の「障害」の部分を理解し支援を考えることが当事者の方の理解につながるとあらためて思いました。

三谷

9月研修会報告

大田区の「Colors」という団体で、定期的に行われている「Talking Gig」というイベントに行ってきました。この回のテーマは、「障害と社会モデルとケイパビリティ・アプローチ」。

・・・なんだそれは・・・という感じですね^^;障害を考えるときに、「社会モデルと医学モデル」という表現がよくされます。

その、【社会モデル】ってなんだろう？というお話と、世界の「開発」分野で提唱されているひとつの見方「ケイパビリティ・アプローチ（潜在能力へのアプローチと訳される）」について前半お話がありました。詳しくお伝えするには紙面が足りませんが、選択の保障や自由の拡大といった要素が含まれている点が、自分の興味の範囲と重なっていてとても刺激的でした。

そしてこれは、障害福祉に留まらず、貧困問題等世界の開発分野で使われている見方なので、障害福祉の枠を越えて、いろいろな分野の人と対話を深めていくひとつのツールになりそうなワクワク感がありました♪お話をしてくださった久野さんは、ＤＥＴ（障害平等研修）という研修を草の根で広めている方です。

障害当事者自身が発信者となり、社会にある差別や偏りを明らかにしていくことで、社会を変革する方向から障害者の暮らしをより良くしていこうというアプローチが素敵で、活動を追いはじめているんですが、この日もそのエッセンスが満載でした。

このイベントには、それぞれに当事者として活動をされていたり、支援者として日々向き合っていたりいろんな人が集っています。その“ごたまぜ”感も、すごく面白いなと感じます。

今後も、いろんなテーマでイベントが開催されるようなので、お出かけ情報でも随時ご紹介していければと思っています！（http://www.ustream.tv/recorded/53715933←ＷＥＢで録画が観れます！）

佐藤

COLUMN

0と1の間にあるもの

年のせいか、一年ってどんどん短くなっていく感じがします。今年も、あっという間にあと２ヶ月になりました。この時期になると気になるのが今年の流行語大賞でしょうか。といっても去年の大賞はと聞かれてもすぐには出てきませんけど。確か『ワイルドだろう！』でしたっけ。いつも何が流行るのかわからない世の中ですが、

よく言われることですが、なんとなくその年の世相を現しているのでしょうか。今年私がなんとなく気にいっている言葉が東京エレキテル連合の『ダメよダメダメ』です。なんとなく否定しているようで、否定していない昭和のにおいを感じさせる微妙な感じが好きです。昨今のyesかnoか0か1かはっきりさせないとすまないようなデジタル思考が蔓延している世の中で、受け取る人によってどっちつかずのこの言葉はちょっとほっとする部分でもあります。

デジタル流行にもわけがあります。世の中のすべてが効率的に処理できるからです。情報を間違いなく伝達するには受け手と送り手の約束事が欠かせません。情報をデジタル化することによってその約束事が簡単に決められるからです。ですから情報を０と１にデータ化しその間の余計な情報を排除するわけです。でも排除されたその１と０の間の情報は本当に必要のないものなのでしょうか。デジタルの代表のような、ノーベル賞で話題のLEDでさえごく短時間で見ればゆっくり明るくなり、ゆっくり消えていきます。その点いているのか消えているのかわからないような状態に意味を求めてもいいのではないでしょうか。

まあ道具のことはさておき、約束事があるようでない人間関係や、利用者さんとの関係も簡単にyesかnoで決めてしまうと、その間の微妙なニュアンスが伝わらなかったりします。私も支援中によく利用者さんにダメだしすることがありますが、それは私のダメであって、利用者さんには伝わっていないかも知れないし、他の支援者だったらダメだししないかもしれません。大事なのはダメかダメでないかではなくて、その間のもっとどっちつかずのことだったりします。人間はデジタル機器ではないので100%情報を伝えるなんてことはできません。それをどちらかに決めてしまうデジタル思考は生身の人間の情報伝達には合わないのではないかと思います。たしかにダメとダメじゃないが相手によって変らないことは、利用者さんにとって混乱が少ないかもしれませんが、それでは施設や家に閉じこもっているのと変りません。せっかく地域に暮らすのであれば人との付き合い方もそれなりに変っていってほしいと思っています。情報のデジタル化ではなくて、大勢の人と付き合うこと、それが情報の確実な伝達に結びついているような気がします。さて『ダメよダメダメ』はあなたにとってyes or no?

11月ヘルパー月例会

■テーマ：ボディメカニクス(介護中の体の動かし方)
■日　時：11月14日(土)　18：30～20：30
■場　所：はちくりうす事務所２階
■住　所：鷹番3丁目１４－９
※　あとで出欠確認をしますのでよろしくお願いします！

New Face　新しく職員が増えました　アベサミス　マルクス　ポンペイ　ラモス　さん

こんにちは マルクスです。
この度 はちくりうすの社員になりました。これからは、もっと気を引き締めて仕事に取り組んでいきたいと思っております。スタッフの皆様と一緒にベストを尽くし力を合わせていきそして、利用者さん 利用者さんのご家族の方と共により良い環境作りをしていきたいと考えております。どうぞよろしくお願い致します。

マルクス

マルクスさんは自己紹介文を見てもわかるように、すごくまじめなフィリピン出身の２９歳の青年？です。はちくりうすではもう５年ほどヘルパーとして仕事をしてもらっています。名前が長いのでマルクスさんと呼んであげてください。会ったことのある皆さんもいらっしゃると思いますが英語が得意で陽気で冗談好きな一面もあります。ただいま日本語検定１級を目指して猛勉強中。日本人の奥さんとかわいい２人のお嬢さんがいます。これからも、はちくりうすをきっと国際色豊かな明るい職場にしてくれるでしょう。　島田